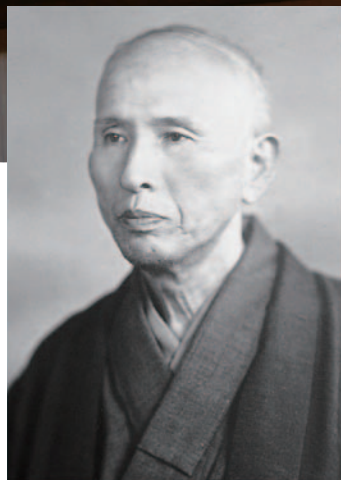




庭園の借景は世界遺産
ヘレン・ケラーをもてなした

※棲霞園は一般公開されていません。



山田安民
(やまだやすたみ 1868-1943)
宇陀郡伊那佐村池上(現・宇陀市榛原池上)出身。関西法律学校(現・関西大学)に入学後上京して英語を学び、明治32年ロート製菓の前身である「信天堂山田安民薬房」を創業。広告を用いた販売戦略にも長け、文才を生かして「シマズイタマズ ロート目薬」など優れたコピーを自身で考案。社業を隆盛に導き、明治大正期の日本の薬業界をリードした。現ロート製菓 山田邦雄・代表取締役会長兼CEOの曾祖父。



奈良・高畑の 迎賓館拝覧

取材・文／風呂井玲子
撮影／杉本将章

奈良公園の飛火野に隣接するその日本庭園は、御蓋の山を借景にいただいていた。目を転じれば、世界遺産の春日山原始林が東へと稜線を延ばす。風に乗って聞こえてくるのは興福寺南円堂の鐘。雅趣極まる高畑の地に明治元年生まれの粹人・山田安民(ロート製菓株式会社創業者)は昭和3年、私邸「棲霞園」を完成させる。和洋の美が溶け合う邸宅には「憲政の神様」とも称された尾崎行雄をはじめ時代を動かした重鎮たちが招かれ、ヘレン・ケラーもここでもてなしを受けたという。

片や一連の設計を指揮したのは、茶室建築家・木津宗詮。大正天皇夫人の茶室も手掛けるなど、当時目覚ましい活躍ぶりを見せていた。近代薬業界の礎を築いた施主・安民と、花形建築家・宗詮。2人の高い美意識は今も色あせることなく邸宅の随所に息づいている。そこは類いなき借景庭園を備えた近代和風建築の迎賓館だった。(文中敬称略)

玄関

玄関正面。踏板の切り込みは宗詮がしばしば用いたとされるデザインで、棲霞園と同時期に築造された奈良県指定文化財・阪本仙次別邸「白雲荘」（吉野郡吉野町吉野山、吉野山保勝会所有）とも共通する意匠。

露地

兜門

ロート製薬創業者
山田安民が
愛した私邸
「棲霞園」

建築家・増田明彦さんと 茶室建築家 木津宗詮の 仕事をたどる

ロート製薬の創業者・山田安民が晩年を過ごした私邸「棲霞園」。

邸宅は今も従業員の厚生施設として利用されている。

建築家・増田明彦さんの解説で

近代建築遺産としての建物の魅力を紹介。

併せて安民の生涯をたどる。

三代木津宗詮（きづ・そうせん1862-1939）

武者小路千家流の茶人・二代宗詮の子として誕生。近衛篤磨公爵の勧めもあって建築図法を習得したと伝わる。大宮御所に貞明皇后のための茶室「秋泉亭^{しゅうせんてい}」を設計し、茶室建築家として名を上げた。「秋泉亭」と棲霞園の「苔厚庵^{たいこうあん}」の竣工時期はほぼ重なる。



〔案内人〕

あきひこ
建築家・増田明彦さん
増田設計室主宰。奈良女子大学記念館(国指定重要文化財)の保存修理で設計・監理を担当。同大学前にある洋風の旧鍋屋交番(昭和3年築)を解体の危機から救い、観光案内所としての再生に尽力した。数寄屋及び社寺建築にも造詣が深い。

客 間

座敷飾りの定型にこだわらず、天袋を中間の高さに配する珍しい形式を床脇に採用。あえて定型を崩したのは「宗詮の自信と意匠力でしょう。書院欄間に大胆に切り込みを入れ、実に粋です。宗詮が新たに編み出したものではないでしょうか」と増田さんは宗詮のデザイン力にも感嘆する。磨丸太の長押が巡る客間は、格式張らずに客人を迎えるにはふさわしい設え。茶室の待合としても使われ、茶会への期待が高まる。



ロート製薬株式会社の創業者・山田安民（1868―1943）の故郷は奈良である。明治元（1868）年、宇陀郡伊那佐村池上（現・宇陀市榛原池上）に生を受けた安民は明治32（1899）年、32歳で「信天堂山田安民薬房」を設立。創業日の2月22日付新聞には、気概に満ちた広告文が掲載された。

「売薬営業者は（中略）国家の衛生業務の一端を司るものにして、傍ら一の公職を帯びふるものなりといふも、敢えて過言にあらず、是れ余が年来の持論なり」。

「余」とは幼き頃から文才に秀でた安民

その人。売薬営業に関わる者の責任と使命を高らかに謳い上げた。「薬業は国民の健康に奉仕する、重要な使命を担う」。そんな誇りを生涯にわたって抱きつつ、一徹であり誠実な薬業人は明治・大正期の日本薬業界を牽引していく。

気骨の人、安民はモダニストでもあった。目薬の命名に腐心した際には、開発した博士が師事したロート・ムンド博士から名を取り「ロート目薬」に。薬の商品名には漢字を当てるのが一般的だった明治末期、横文字を冠した商品は業界の話題をさらった



洋 室

棲霞園の書院2ヶ所に日本建築特有の「花頭窓」^{かとうまど}と、それをデザインしたものが使われており、この部屋の天袋と扉の意匠もそれと共通する。「日本建築の意匠を洋風にアレンジしたモダンなデザイン。数寄屋建築に通じた宗詮だからこそ生み出せたものでしょう」。厚みのある木を網代風に張った床。その周りを縁取り模様が粹に巡る。安民が「和洋折衷」と言った洋室には大理石のマントルピースが備わり、ガスストーブが設置されていた跡が残る。外光が豊かに差し込むサンルームを備えた部屋は、和と洋が見事に溶け合う極上の迎賓室。棲霞園と命名した近衛文麿をはじめ犬養毅、尾崎行雄ら政界の重鎮や徳富蘇峰も訪れた。ここで主の安民と親交を深め、時局を語り合ったのだろうか。



昭和12年5月、奈良で鹿と戯れるヘレン・ケラー（左）。

に違いない。また、自身が尊敬する英国のジョンブライト博士にあやかっつて、長男を「輝郎」^{きらう}と名付けた。新しいものが好きなモダンリスト。そんな進取の気性が、洋室の設えからも見て取れるようだ。
昭和12（1937）年5月、安民が暮らす棲霞園にアメリカから賓客が訪れた。静かに目を閉じ、奈良公園で鹿とたわむれるその人は、ヘレン・ケラー女史（写真上）。初来日に際して、女史はなぜ安民を訪ねたのか。答えを求めるなかで、公益のために尽力を惜しまない篤志家としての安民像が浮かび上がってきた。

大正9（1920）年、興福寺にほど近い奈良市東向町に「私立奈良盲啞学校」が設立された。当時、奈良県に盲学校はなく、設立構想を知った安民は「奈良県で、もし盲学校を設立されるのなら力になりましょう」と協力を申し出る。10人ほどの生徒が集まり、教会（現在の日本聖公会奈良基督教会）を昼間だけ借りる形で開校した。安民は初代校主となり、開校後も月々の生活費を送るなど私財を投じて財政支援を継続。私設の盲学校は昭和のはじめに奈良県に移管され、その後は大和郡山市の奈良県立盲学校へと引き継がれている。

「何事も公共の仕事をするには、私利私欲を捨てて」と信条に掲げた安民。その崇高な精神と障害児教育への深い理解は、ヘレン・ケラーの知るところとなった。邸宅に招かれた女史は、御蓋山を借景にする庭園で安民と食事を共にする。祖国は互いに違えども、福祉の心が2人の偉人を引き寄せたのかも知れない。

喜寿を迎えてからの安民は、棲霞園に度々客人を招き、茶会を催した。席上、後継者の長男・輝郎を紹介したり、社員を招いて歓談するなど私邸での時間を楽しんだという。

茶室「清音亭」

薄茶の接待は主に六畳の茶室「清音亭」で。床の間前面の左に袖壁を付けた袋床。床脇は書院風に造り、文机と大きな窓を設ける。「苔厚庵とは対照的に趣きを変え、開放的な印象の茶室で、床脇は安民氏の居室と通じる構えです」。



宗詮手製の水屋箆筒。



「苔厚庵」内部

宗詮は大正天皇妃・貞明皇后の御殿に設けられた茶室「秋泉亭」（昭和4年竣工、同20年焼失）の設計者として知られ、その推定図面などによると同じプランで設計されている。床の間は壁の隅を丸みをつけて土壁で塗り回し、柱を見せない室床。「そうすることで狭い空間を無限に広がる世界に表現しているのでは」（増田さん）。客人の頭上の天井は網代に組まれ、格式と精緻さが共存している。



茶室「苔厚庵」

接客の場として邸宅の中心に位置づけられる茶室「苔厚庵」。昭和16年頃、晩年の安民は薬業関係者や各界の重鎮を招いて、度々茶会を催した。

書院の天板には机として使われていたような形跡が残る。「書院はもともと文章を書いたり読書をする空間でしたが、後に座敷飾りとして形式化していきました。安民さんは書院本来の使い方通りに、ここで手紙を書いたりなさっていたのではないのでしょうか」。和歌に造詣が深く、また書の大家も唸らせるほどの能筆家だった安民。窓辺の佇まいからは、没後72年の時を越えて、文人だった主の息づかいが伝わってくるようだ。

安民夫妻の居室

庭越しに茶室を臨める最高の場所に、安民夫妻の部屋を配置した。書院には竹をモチーフにして趣向を凝らした欄間を設える。「設計者はもちろん大工や指物師も施主の好みを熟知して意匠に取り入れたのでしょ。床柱は自然木をそのまま生かし、その位置も自由に動かしています。大らかさが漂う造りの書院です」と増田さん。



「難(かた)しとて 思ひたゆまばなにごと なることあらじ人の世の中」(明治天皇御製)「何ごととも為すべきことを怠っていては成功しない」と説く明治天皇御製の歌を、和歌に親しみ能筆家としても知られた安民が綴った。

若草山や御蓋山の遠景を借りた庭園を邸宅から望む。世界遺産の春日山原始林が秀麗なる稜線を延ばし、園内に佇めば神域が間近に迫るかのよう。作庭当初は庭園内に小川が流れ、奈良公園の飛火野も見通せたという。絶景を讃えるかのように、鳥たちが嬉々としてさえずっていた。





気骨の薬業人 山田 安民

ロート製薬創業者
山田安民が
愛した私邸
「棲霞園」

「如何にして生きていくべきかの問題は如何にして死すべきかの問題なり」（山田安民著『呻吟録』より）。40代の頃、病床で記した自著には、人生観の一端がにじむ。75歳になってもまだ間もない昭和18（1943）年4月14日、安民は永遠の眠りについた。高畑の自宅には弔問客数千人が参列。遺骨は宇陀市榛原池上にある生家近くに葬られた。

明治から激動の昭和初期を駆け抜けた気骨の薬業人は、この私邸で多くの人と交わり、風雅に浸った。安民が永遠の眠りについて今年で72年。主が愛した邸宅と庭園は日々慈しむ人たちの手で守られ、今も生氣に満ちている。

参考文献『ロート製薬100年史』
モノクロ写真提供 ロート製薬



昭和10年代はじめの棲霞園（絵ハガキより）。



太平洋戦争の戦局を案じながら、安民は棲霞園で生涯を閉じた。参列者は長い列を作り、巨星の旅立ちを見送った。



客室へとつながる広々とした廊下。棧が巡る上層では歌舞音曲が繰り広げられたという。粹人だった施主のもてなしの心が邸宅の随所に息づいている。



ベルを押して話をする并使用人部屋に直接つながったらしく、今でいうインターホン。新しいもの好きだったという施主が使う光景を見て、お客さんはさぞかし驚いたり喜んだりしたに違いない。



邸宅は戦後の一時期、米軍将校の住居として接収されていた。天井が吹き抜けの台所は進駐軍がペンキを塗り込めた。「でも、意外に違和感がないのは、設計当初から台所は西洋的なものを意識して構築されていたから。この色の方がむしろ馴染みがいいとも言えますね」と増田さん。浴室も同様にアメリカナイズされ、時が止まっている。

施主のもてなしの心を映す 昭和初期最高レベルの近代和風住宅

建築家・増田明彦さん

お茶室を居住空間から切り離して設計するのを一般的とすれば、苔厚庵は安民さんご自身の居室から臨める位置に置かれています。そんな斬新な設計からも、施主がいかにかの茶の湯を愛しておられたかがよく窺えます。近代和風建築の時代の産物ともいえる素晴らしいデザインが邸宅の随所に見られ、設計を指揮した木津宗詮の力量がしのべられます。当時としては最高レベルの技術者集団が建てた邸宅。それは安民さんの来客をもてなす心の表現に他なりません。時代を動かした人が集った邸宅は、昭和初期の文化を凝縮したような空間だといえるでしょう。（談）

